

8月10日（月）ヘブル人への手紙1章3節

「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着されました。」（3節）

3節において、御子の偉大さがさらに述べられています。

最初は「御子は神の栄光の輝き」ということです。この概念を燦然とした光からほとぼしり出る輝きと表現し、それを日の出の時に、まばゆいばかりの夜明けが現れることに似ていると言った人がいます。旧約時代においては、人々は神の栄光の輝きを見ることはできず、もし誰かが神の栄光の輝きを見るなら、その人は死ななければなりませんでした。しかし、イエス・キリストを通して、誰もが神の栄光の輝きを見ることができるようになりました。それは、まさにイエス・キリストを通して現れた新しい時代の幕開けを意味していると言えます。

ヨハネの福音書1章14節に「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」とあります。ヨハネははっきりと、「この方の栄光を見た」と言います。ですから、イエス様ご自身の姿、みわざ、教え、ことば、働きなど、すべてがイエス様の栄光を現わしていたと言えますし、まさに十字架にかかれたイエス様の姿こそが、イエス様を最もよく現わされる栄光に満ちたお姿ではないかと思わされます。このようにして神の栄光の輝きをイエス様がもたらされたことに心から感謝をささげたいと思わされますし、神の栄光を輝かせるイエス様は、まさに本質において父なる神と全く同じである、神そのものであったということです。聖書は、そしてイエス様の姿は、このことを明確に証しています。

次に、御子は「神の本質の完全な現れ」と言われています。本質とは、そのものの持つ本来の、欠くことのできない性質と定義されています。つまり、御子イエス様は、本質的に神であられ、神としてのすべての本質を持っておられたイエス様が、霊であるがゆえに目に見えない神の本質を目に見えるかたちで完全に現わされたと言えます。

欄外中に「直訳「実体の刻印」」とありますが、ここで現れと訳されている言葉は、鋳型、もしくは刻印にあたる語です。いわば、象るために蠟に押した印影は印象と全く同一の形象を持っていることを表現しています。それほどまでに、御父の本質と御子の本質には何らの相違も存在しないということです。私たちは、なおもみことばからイエス様を正しく理解したいと思わされます。

8月11日（火）ヘブル人への手紙1章3節

「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着されました。」（3節）

「その力あるみことばによって万物を保っておられます。」ということですが、保つという言葉は、支えるとか支持するという意味を持っています。これは、17～18世紀ごろのヨーロッパの啓蒙時代に英国で流行った理神論の考え方を完全に否定するものです。理神論とは、神は天地万物を創造された後、世界との関りを一切断ち、自然の法則に任せるというものです。理神論者は、神を時計職人のような存在だと考え、世界という時計を組み立てて動かした後は、自らの法則で動くままにしていると考えます。しかし、今日のみことばは、今も御子は、創造の秩序の中にあって力強く働いておられると語っています。また、コロサイ人への手紙1勝17悦に「御子は万物に先立って存在し、万物は御子にあって成り立っています。」とあり、聖書全体が、このことを語っています。そして、どのようにして保っているのかと申しますと、「力あるみことばによって」です。まず、私たちがここでおぼえるべきことは、みことばには力があるということです。神は、ことばをもって天地万物の創造を成し遂げられました。また、イエス様もことばをもって嵐をしずめ、病をいやされ、悪霊を追い出されました。まさに、その力あるみことばをもって、今も万物を保っておられます。ですから、主を信じる私たちは、神を信じようともせず、知ろうともしない人たちのように、これから先に何が起こるのだろうかとか、世界はどうなってしまうのだろうかとか心配したり、恐れたりする必要はないということです。

次に「罪のきよめを成し遂げ」ということです。イエス様は罪のない方として十字架の上で罪の贖いときよめのわざを成し遂げられました。（9章11～10章25節参照）ここで言われている罪のきよめとは、良心をきよめるとか（9章14節、10章22節）罪を取り除く（9章26節）ことを指しています。

「いと高き所で、大いなる方の右の座に着されました。」とは、イエス様ご自身が地上での務めを果たされた後、本来帰るべき場所へ帰られたということであり、まさに神の御子であり、まことの神であられる方には、そこが最もふさわしい場所と言えます。そして、被造物である私たちは声高らかに、このイエス様を常にほめたたえ、ひれ伏して礼拝するのです。

8月12日（水）ヘブル1章4節

「御子が受け継いだ御名は、御使いたちの名よりもすばらしく、それだけ御使いよりもすぐれた方となりました。」（4節）

ほとんどのユダヤ人にとって御使いというのは、崇められるべき存在でした。というのは、シナイ山において律法が与えられる時に働いたのが御使いだからです。シナイ山においてモーセに与えられた律法は、ユダヤ人にとっては神様からの至高の啓示でした。ですから、そこで遣わされた御使いが当然あがむべき存在となったわけです。（ヘブル2章2節参照。注：「御使いを通して語られたみことばさえ」とありますが、この「みことば」がモーセの律法を指していると考えられます。）そのようなところから、御使い崇拜さえ出てきたようです。（コロサイ2章18節参照）

そこで、ヘブル人への手紙の記者は、「御使いたちの名よりもすばらしく」「御使いよりもすぐれた方となりました」と御子イエス様が御使いよりもすぐれていることを宣言しています。「御使いの名よりもすばらしく」ということに関してですが、ユダヤ人にとって、名はただその人自身を表すだけではなく、その人がどういう人かということも表します。ですから神様もいろいろな名を持っていますが、それによって神様がどういう方が表しているのです。（例：エル・シャダイ＝全能の神など）つまり「御使いの名よりもすばらしく」ということは、すべての面で御使いよりもすぐれていることを意味しています。なぜ御使いの名よりもすばらしく、御使いよりもすぐれた方となったのかと言いますと、イエス・キリストは神の御子であり、神だからです。神が被造物である御使いにまさっているのは当然のことです。そして、イエスの名は何にもましてすばらしく、私たちが常にイエスの御名を心からほめたたえるのです。

8月13日（木）ヘブル人への手紙1章5節

「あなたは、わたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ。」

「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。」（5節）

最初の「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ。」というのは、詩篇2篇7節の引用です。この詩篇2篇7節は、マルコの福音書1章11節「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」使徒の働き13章33節「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ」にもそれぞれ引用されています。詩篇2篇7節の「あなたはわたしの子」とは、ダビデに対して言われています。そして、「わたしが今日、あなたを生んだ」とは、神が王を自

分の子として受け入れるという意味では、ダビデの戴冠式を指していると考えることができます。そして、新約聖書においてはイエス・キリストに適用されますが、その場合にはキリストの受肉、もしくはよみがえりを指しています。使徒の働き 13 章 33 節には「神がイエスを死者の中からよみがえらせ」とありますので、少なくともその個所は、キリストのよみがえりを指しています。

そして「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。」とのサムエル記第二 7 章 14 節からの引用については、父はダビデを、子はソロモンをそれぞれ指しています。それが新約聖書においては、子はイエス様を指して用いられています。

5 節に「神はいったい、どの御使いに向かって言われたのでしょうか」とありますが、この表現は「決して言われたことはありません」との答えを期待する疑問文です。つまり、神はキリスト以外の御使いに子という名を用いたことがないということであり、それはイエス様がただ一人神の御子と呼ばれるにふさわしい方だということです。確かにイエス様は、被造物である御使いよりもまさったお方であることが、みことばを通して証しされています。

8月14日（金）ヘブル人への手紙 1 章 6 節

「神のすべての御使いよ、彼にひれ伏せ。」（6 節）

ここに「長子」が出てまいります。長子はイエス様を指していますが、恐らく、造られたすべてのものより先に生まれた方、すなわち万物が存在する前からすでに存在しておられた方、死者の中から最初に生まれた方、多くの兄弟たちの中で長子となられた方ということです。（コロサイ人への手紙 1 章 15、18 節；ローマ人への手紙 8 章 29 節）ここでイエス様に対して子という表現ではなく、あえて長子と言い換えたのは、イエス様に対する優越性を長子という言葉で表さそうとしたのだろうと思われます。

また、詩篇 89 篇 27 節からは、ダビデの子孫である王を長子とし、王権と統治を授けると同時に「地の王たちのうちの最も高い者とする」と言われていますように、長子には、すべてにまさる権威を授けるという意味があり、そのような意味でもキリストは高く上げられたお方と言えます。

6 節後半は、詩篇 97 篇 7 節の引用です。今日の個所では「主」が「彼」に言い換えられていますが、御子であるイエス様が、主なる神であり、礼拝されるべきお方であることを示すために、詩篇 97 篇 7 節が引用されています。そして御使いも被造物として、イエス様を主としてあがめ、礼拝するように命じられています。そのようにして私たちも天の御使いとともに声を

合わせて主をほめたたえつつ、礼拝するべきであり、本来は人類を含めて、すべての被造物が主イエス様の御前にひれ伏し、礼拝をささげることが命じられているのです。それと同時に、私たちはイエス様がどのような方かを知り、礼拝をささげることができていることは、罪を赦されたことによる大きな恵みです。常に主イエス様に心からの礼拝をおささげしましょう。

8月15日(土) ヘブル人への手紙1章7～9節

「神よ。あなたの王座は世々限りなく、あなたの王国の杖は公正の杖。あなたは義を愛し、不法を憎む。それゆえ、神よ、あなたの神は、喜びの油で、あなたに油を注がれた。あなたに並ぶだれよりも多く。」(8、9節)

7節は、詩篇104篇4節「風をご自分の使いとし、燃える火をご自分の召使いとされます。」からの引用です。これは、神様は自然をも支配し、それらに命じられ、ご自身の目的を果たすためにすべてを用いられる大いなる力ということです。特に、風は思いのままに吹き、時には思いがけないほどの破壊的な力を持っていますが、神は人がどうすることもできない風をも支配しています。それと同様に、神様は、自分のみこころを達成するために御使いをも風とし、炎とし用いられるということです。ですから御使いは、神様のしもべにすぎません。

8節は詩篇45篇6、7節の引用です。この詩篇の表題に、「愛の歌」とありますが、イスラエルの王の婚礼の歌でもあります。そして、この詩は旧約時代の王の統治を通して、将来にかけるとこしえの御国を治める王に言及されています。それは、もちろんメシヤであるイエス様ですが、ここで注目すべきことは、そのイエス様が神と呼ばれていることです。そして新約聖書にもそのことがいくつかの箇所でも語られています。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」(ヨハネの福音書1章1節)「キリストは万物の上にあり、とこしえにほむべき神です。」(ローマ人への手紙9章5節)このようにして、イエス様は神だということが分かります。先ほども見たように、御使いはあくまで神のしもべであって、決して神ではありません。その御使いがイエス様以上にあがめられるということはありません。私たちも神であるイエス様を第一にすべきであって、イエス様以上にあがめるものがあることはありません。

また「あなたの王座は世々限りなく」とありますように、イエス様は永遠から永遠まで続く御国を治められます。そこはまさに義をもって治められる所ですから罪が入り込んでくる余地はありません。そして、そこにおいては喜びの油が豊かに注がれるのです。私たちも将来的に御国をイエス様とともに治めるようになります。その時が実現することを信じて、地上の生涯

を希望を持って全うさせていただきます。

8月16日(日) ヘブル人への手紙1章10～12節

「主よ。あなたははじめに地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。」

(10節)

ここは、詩篇102篇25～27節の引用です。ヘブル人の手紙では、「主よ。」ということばが10節の冒頭に挿入されています。つまりキリストが神として「主よ。」と呼ばれているわけですね。そして、この10～12節は神としてのキリストの全能が宣言されているとすることができます。キリストは、すべてのものが存在する前から存在し、そして何もない状態からすべてのものを創造されました。まさに「初めに地の基を据えられた」のです。そして、すべてのものを摂理の御手をもって支配しておられるのです。まさにキリストはまことの神なるお方です。そして、物質は周りからのさまざまな影響を受けて変わっていきます。「すべてのものは、衣のようにすり切れます。」(11節)と言われている通りです。何十年着ても、新品のままなどという着物はどこをさがしてもありません。着物は年月とともに古びていきます。そのようにして、私たちの周りにあるものも古び、いつか滅びていきます。しかしすべてのものは滅びても、主なるキリストだけは永遠に存在しておられる方です。そして永遠までも、その御手をもってすべてのものをご支配しておられるお方です。

私たちが、キリストはその御力をもってすべてのものを創造された創造主であり、今もその全能の力をもって永遠までもすべてのものを治めておられるということを信じる事ができれば、どれほど平安な思いをもって私たちは信仰生活を送ることができるでしょうか。そのことを心から信じる事の出来る者とさせていただきます。